



▲The Campus of Pearson College(ピアソン・カレッジのアニュアルレポートより)

## 年々増すカレッジの存在感

私が会社を辞めて自分で事業をやりたい、

がら二年間の留学中に見出すことはできなかった。ただ、自分の得意なものに特化して、それにひたすら磨きをかけることの大切さは学んだつもりだ。学力でも、運動能力でも、芸術的才能でも、何でもいい。できないことをあきらめるのもまた勇気だ。そうして、私の「自分力」探しは続いた。留学から戻って、大学でも、最初に就職した会社でも、幸い非常に優秀でかつ度量の大きな仲間や上司に恵まれた。大学の友人たちは、競争するということを忘れたように他人の長所ばかりに敏感で、弱点は補い合おうとする風変わりな習性を持っていた。就職先の米国人の上司は、金融業界にありながら余り数学を得意としなかった私に向かつて、「君の才能は他にある、早く昇進してそれを活かすんだ」と、酒を飲むたびにそう言い聞かせてくれた。

と言い出した時、その上司は止めなかった。優秀な人たちのもとの大きな案件を手掛けさせてもらえるというのはとてもエキサイティングで学ぶことも多かったけれど、私には自分の何がそこで活かされているのかよくわからずに、悩んだ。

今は、五〇人余りの小さな会社を十歳以上年上の社長やほかの役員と共に率いている。給料は前職の半分以下だが、「自分力」を充分に活かしているという確かな実感がある。零細企業ゆえにいつどうなるかわからないリスクさえも、純粹にチャレンジだと思つて楽しめる強さは、カレッジでの生活が齎してくれたもう一つの産物かも知れない。今年六月、一〇年ぶりの同窓会に参加するために再びカレッジを訪れた。普段は意識することが少ないが、あの二年間に吸収した価値観は、自分でも気付かぬうちに静かに成長し、人生の節目節目でその存在を主張していることに気付く。改めて、チャンスを与えて下さった全ての方々に心から感謝すると同時に、やんちゃな高校生たちが今年もまた、既存の概念の枠を超えて、自由に飛び立ってくれることを祈つてやまない。

(連絡先 lin@racoon.ne.jp)

# 正論

●電話で/0120-34-4646  
●FAXで/03-3241-4281  
産経新聞社へ

12月号 定価680円 (税込み)

お問い合わせは

「北朝鮮・拉致・核・日本」大特集115ページ  
**北の核に無神経だった小泉訪朝の大罪**  
明日のために覚悟を固めよ 中曽根康弘  
戦略的思考とは何か (東谷暁)  
**拉致被害者に何が起きたか** 小田晋  
北朝鮮の危機的國家事情 (李英和) / 「日朝新時代」メディアのひとりよがり (大月隆寛)  
**わたしの「9・17から10・16」観察記** 西尾幹二  
“永久保存版”北朝鮮迎合発言集 (柿谷勲夫) / つくる会教科書「拉致記述」にケチをつけた輩 (八木秀次)  
**拉致事件に知らんぷり あなたの非情は忘れない!** 荒木和博vs石川水穂

# 自分力

UWCピアン・カレッジ(カナダ、一九九一〜九三年)。九八年三月東京大学経済学部卒業、同年モルガン・スタンレー投資銀行部入社。二〇〇〇年四月に転職。同年七月より現職。

ラクーン取締役

渡邊りん

わたなべ



●(社)ユニテッド・ワールド・カレッジ(UWC)日本協会は、世界各国から派遣されてくる生徒たちとの教育体験の共有により、国際感覚豊かな人材を養成するという理念を掲げるUWCの日本委員会として、毎年一〇名以上の高校二年生を世界各地にあるUWC傘下の高校に派遣し、すでに三六〇名以上の卒業生を輩出している。

## 井の中の蛙、旅に出る

留学前の私ときたら、とんでもないクセ者だった、と本当にそう思う。学生運動中にバリケードの後ろで恋に落ちたという両親の血をそのまま受け継いで、多弁で、野心家で、既存の体制というものにいつも疑念を抱いていた。生徒会の役員をやりながら、クラスの皆を率いて授業をポイコットしたりする問題児だった。

たいした実力もないくせに運だけはよかったから、中学も高校も入試では苦勞しなかった。そこで調子にのってしまったのがまずかった。勉強などほとんどせず部活や遊びに没頭しているうちに、面白いくらい成績が下がっていった。「暗記だけの勉強なんてすぐに挽回できる。それよりも大切なのは今の評価制度では測れない『自分

力』を伸ばすことだ。」半ば現実逃避とも言える結論を見出して留学を決めたのは、高校一年の終わりだった。

## 「自分力」?

そんな一六歳の野心は、留学直後に打ち砕かれることになる。得意だったはずの英語がとにかく通じない、わからない。辞書の持込みが許されている試験でさえ、印字のわずかなカスレで辞書もひけず、あまりの悔しさに試験中に涙した。友達が多いだけ取り柄だったはずなのに、カフェテリアでは速いペースの会話についてゆけず、冗談を言うどころか笑うタイミングさえわからない。「自分力」どころの騒ぎではない。状況が変わるまでに一〜二カ月かかっただろうか。気が付いたら、授業も会話も理解できるようになっていた。

いったん自分の非力さを思い知ると、人は案外余裕がでてくるのかも知れない。知らず知らずのうちに自分にも染み付いていた杓子定規なものの見方が、ある時ふっとほぐれた気がして、そうしたら、突如としてすごい奴らに囲まれていることに気付いた。四則演算さえままならないのに六カ国語を操るスウェーデン人や、英語は一向に上達しないけれど数学では右にでる者がいない中国人や、ジャズピアノが天才的に上手いアメリカ人もいた。自分が井の中の蛙だったことを痛いほど思い知ったが、不思議ともう悔しくはなかった。

カナダの雄大な自然と美しすぎるキャンパスに抱かれて、新しくできた友達と素晴らしい楽しくてチャレンジングな日々を送りながら、自らに問い掛けた。自分が、日本の教育の枠を飛び出して伸ばそうと誓った「自分力」とは何だったのか。

## 一〇年を経て

その問いに対する明確な答えは、残念な